

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 26 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520135

研究課題名(和文)現代視覚表象におけるメディア的身体の研究

研究課題名(英文)Research on the Corporal images in contemporary visual media

研究代表者

阿部 宏慈 (Abe, Koji)

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：10167934

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代の視覚表象における身体イメージの問題を映画や写真、マンガなどの現代的メディアを対象に検討したものである。阿部宏慈は、特に2011年の東日本大震災後のドキュメンタリー映画における映像の受容の問題を可傷性の概念を中心に検討した。研究分担者の中村唯史は、マンガ的描写における主観的視点表現の問題を現代の日本マンガ作品を中心に研究した。同じく清塚邦彦は、これらの行論の哲学的理論的基盤をなす議論によって研究会を主導し、この間、関係学会等で発表をおこなった。本研究の成果は、研究会等で研究に協力した他の研究者との共著論集『現代視覚表象におけるメディア的身体の研究』によって発表された。

研究成果の概要(英文)： This research project focuses on the problem of the Corporal images in the visual media as documentary films and the other forms of visual media like the photography and the Manga. Koji Abe analyses the transformation of the reception of documentary films on the theme of vulnerability of images especially after the disaster of the 11th march 2011. Tadashi Nakamura examined the problem of visual expression of subjective point of view by the analysis of visual description in Manga especially in the works of Fumiyo Kono. Kunihiro Kiyozuka gave a theoretical basis on these discussions. Research results of this project are published together with articles by other researchers invited to the discussion, in a collective work "Research on the mediated body in the contemporary visual representation".

研究分野：表象文化論

キーワード：表象文化論 映画論 マンガ論 哲学

1 研究の背景

本研究グループは、本研究に至る以前から視覚媒体における「現実的なもの」の問題を、<リアル>と<アクチュアル>というキーワードを用いて理論と作品分析の両面から探究して来た。そこで明らかになったことは、かつて表象的な<リアリティー>の基底をなすべきものとして、ある種、特権的な参照基準的概念を形成していた<身体>もまた、もはや記号的象徴的な体系に対する批判的参照点ではなくなりつつあるということであった。

他方、電子的ネットワークと視覚媒体の遍在(テレビ、Web画像、監視カメラシステムなど)という現代の状況において、身体的リアリティーとはむしろ実体的な身体概念と真っ向から対立する概念であるようにも見えるということ、あたかも仮想的空間の中にすでにあるかのように電子的な情報のデータベース(あるいは資料体 [CORPUS])の中に分類され記録され、さらには検索され交換され流通する身体的イメージは、<身体>という語、あるいは概念のかつて持っていた実体的なニュアンスから遠くかけ離れているように見えるということであった。

2 研究の目的

以上のような認識を背景として、本研究グループは、現代の視覚表象メディアにおける身体の問題を、特に映画(中でもドキュメンタリー映画)、写真、そしてマンガといった媒体を対象に研究することとした。そのことによって、特に身体論の史的形成と現代的な身体表象論とをつき合わせることによって身体表象をめぐる現代の思想的状況の解明をおこなう。また、その理論的成果の具体的視覚表象への適用を試みる。

その結果、代表者および分担者は、期間中に、各自の担当する領域において、いわゆる「身体論」と今日のメディア的状況との接合、離反、あるいは乖離の実態について、可能な限り明らかにすることを目的とした。

3 研究の方法

研究は、三人の研究者がそれぞれの対象領域を分担して、理論的な探究をおこなうとともに、具体的な作品の分析をおこなった。

研究代表者である阿部宏慈は、特にフランス現代哲学における視覚表象の理論の成果を援用しつつ、映画における身体表象の問題を、ドキュメンタリー映画からアニメーションまで幅広い作品を対象に研究をおこなった。阿部はすでに、本研究プロジェクトの準備にあたり、2010年度日本フランス語フ

ランス文学会東北支部大会(11月13日、於：秋田大学)のワークショップにおいて、「メディア化された身体のカロスオーバー」と題して、問題提起をおこない、CGアニメーションにおける表象の問題と現代的な映像の暴力の問題という両面から、現代的な身体論と映像の問題の所在を問う準備をしていた。その上でしかし、2011年に生じた東日本大震災による映像に対する問いかけは、同年に開催された山形国際ドキュメンタリー映画祭での討議などを通して、一層尖鋭化された問題として、本来の本研究の方向性に一定の転換を促すこととなった。ともあれ、メディアによって切り取られた身体の問題を問い、痛みに向かって開かれた傷口としての映像を問うという、すでに2010年の時点でなされていた問題提起は、この間の研究全体の基調となることとなった。2012年にアニメーション研究者の藤津亮太氏を招いて、アニメーション映画における「心と身体の距離」というテーマで講演と討議をおこなった。また、2012年度には、ライブツィヒ(ドイツ)の映画祭に、2013年度にはマルセイユ(フランス)、2014年度にはモントリオール(カナダ)のドキュメンタリー映画祭において、映画作家や批評家あるいは映画祭のオーガナイザー(バーバラ・ハマー、リシャル・ブルイエットなど)と議論をおこなうことで問題点をさらに明確にすべく努めた。2014年秋には、モントリオール大学において「山形と映画」というタイトルで、日本におけるドキュメンタリー映画の現状と東日本大震災以降のドキュメンタリー映画の状況について発表をおこなうとともに、同様に震災をテーマにした映画について発表をおこなったシュザンヌ・ベスをはじめとする研究者との討議をおこなった。

一方、清塚邦彦は、写真的媒体の真実性の問題を、フィクション論一般の問題と接合しつつ研究した。第一年度には哲学研究者の森功次氏を招いて現代哲学における「身体」論の諸問題をめぐって二度にわたって共同討議をおこなった。同時に、分析哲学や英米哲学、特に清塚の近年集中的に研究をおこなってきているネルソン・グッドマンの虚構論を、写真的な映像と語りの虚構性という問題設定から、新たに分析しなおした。

中村唯史は、第一年度は、まずロシア・フォルマリズムの研究者である八木尚人氏を招き、20世紀ロシアにおける思想や理論と当時のメディア環境の関係という視点から、表象的な身体論への新たな視点を提供しようと試みた。その一方で、マンガにおける身体の問題を、特にマンガという視覚表象に特有の視点の問題から探究し続けることで、写真や映画とは対極にあるマンガというメディ

アにおける身体性の問題を探究することによって、阿部と清塚の論を補完した。たとえば、1970年代から80年代にかけての二本マンガにおける身体表象が、時に作品中の登場人物の設定と乖離するというような極限的な事例をあげて、主観的な表象を（実写とは異なり）そのままに形象化するマンガというメディア特有の身体表象のあり方を分析した。

マンガ的な表象については、その理論的な探究の一環として、森田直子氏（東北大学）に、漫画的表象の起源をなす諷刺画、特にスイスの諷刺画家ロドルフ・テプフェールにおける漫画的な表象の問題について歴史的観点からの教示を得た。漫画的な身体表現と同時に初期のサイレント映画（たとえばリュミエール兄弟による映画のような起源にある映画）に直結する追跡もののストーリーマンガという特異なマンガの領域においてテプフェールが果たした役割についての議論は現代の視覚的表象における身体表現との関係性においてもきわめて示唆に富む議論である。これについては、本研究の成果をまとめた論集において論文として成果の発表を行った。

さらに映画については、大久保清朗（山形大学）氏の協力のもとに、現代的な視覚メディア、特にミュージックビデオの製作現場というきわめて身体的なパフォーマンスと映像の編集等の問題を、映像作家の大久保拓朗氏を招いて講演会と討議をおこない、映画やマンガとはまた異なる現代的な視覚表象における身体の問題について独自の視点からの情報提供を得ることができた。

大久保清朗氏自身も、専門的に研究する成瀬巳喜男の映画作品における身体表象の問題を日本家屋における闊的空間である玄関等の空間的な装置との関係性において読み解くという極めて刺激的な視点を提示し、映像表象における身体的なるもののありかたの分析にもう一つの重要な観点を加えた。

また、身体的な表象のもうひとつの重要な要素である声の問題については、無声映画と弁士によるパフォーマンスの問題を研究している成田雄太（東北大学非常勤講師）の協力を得て、無声映画という言葉ば音声的な身体を剥奪された映像表象媒体において声がどのような形で表象されるかをめぐり討議検討をおこなった。

4 研究成果

本研究の成果は、それぞれの領域において論文の形で発表されているが、特に著書『現代視覚表象におけるメディア的身体の研究』では、阿部と中村を中心に、映画からマンガまで広範な領域における身体的なるものの

表象を再検討し、現実と虚構という記号的な機制のはざまにあって、なおある種の「現実性」と「社会的関係性」の極の間で揺れ動く身体的なるものの多様なありかたを明らかにした。一方では電子的メディアの進展の中で、身体的なるものの表象さえもデータベース的な総体の中に拡散し、偏在するという状況がある。それにもかかわらず、主観的な視点表現の探究や身体表象への倫理的な抵抗というそれぞれのメディアに特有の身体性の新たな表現が模索されている。特に東日本大震災後の世界において、映像や視覚的表象のもつ意味は、大きな転機を迎えたように思われる部分がある一方で、最初期の諷刺画から無声映画などの起源的な視覚表象メディアの検討結果が示すように、映像における身体表象の問題は、おそらく記号的で非＝身体的なるものとしての映像表象という表象そのものの自己規定の枠内に収まりきれない大きな振幅を示すものであることが明らかになった。

今後は、本研究の成果として期間中に発表できなかった部分について、さらに研究を続け、成果が得られた場合には、また何らかの形でこれを発表することになる。

5 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

清塚邦彦、実在しない事柄をよろこび、かなしむこと、『思索』45(1)、査読無、2012、85-108

清塚邦彦、ネルソン・グッドマンの贋作論：『芸術の言語』第3章の分析、『山形大学紀要(人文科学)』第18巻第1号、査読有、2014年2月15日、1-38

清塚邦彦、フィクションの言語行為をめぐって：G・カリーの分析への批判的論評、『山形大学紀要(人文科学)』18巻(2号)、査読有、2015年02月、1-28

中村唯史、1910 - 20年代のエイヘンバウム：フォルマリズムとの接近と離反の過程、スラヴ研究(北海道大学スラヴ研究センター)、査読有、59号、2012年、25-59

Накамура Тадаси, Заполнить небо над Аустерлицем: взгляд М. Бахтина на Л. Толстого, Rossica Lublinensia (Wydawnictwo Uniwersytetu Marii Curie-Skłodowskiej, Poland), VII, 査読無、2013年, C. 289-296.

中村唯史「事実と記録のあいだ：ロシア/ソ連ドキュメンタリー映画をめぐる言説と実践について」中村唯史・高橋和・山崎彰共編『映像の中の冷戦後世界：ロシア・ドイツ・東欧研究とフィルム・アーカイブ』(山形大学出版会、2013年) 査読無、11-26頁

[図書]

阿部宏慈・中村唯史編『現代視覚表象におけるメディア的身体の研究』山形大学人文学部、山形大学人文学部叢書7、2015年3月、149

6. 研究組織

(1)研究代表者 阿部宏慈 (ABE Koji)
山形大学・教授

研究者番号：10167934

(2)研究分担者 清塚邦彦 (KIYOZUKA
Kunihiko)
山形大学・人文学部・教授

研究者番号：40292396

(3)研究分担者 中村唯史 (NAKAMURA
Tadashi)
山形大学・人文学部・教授

研究者番号：20250962